『ヨブ記の黙想　試練と恵み』後半（ミラノ教区の司祭向けの霊操）

カルロ・マリア・マルティーニ枢機卿著　今道瑤子訳　1991 年　女子パウロ会

４．節度と知識

「私たちの神である主よ、あなたは近づき難い秘義で、永遠の光の中に住んでおられます。十字架の高みから啓示してくださったあなたの御子のほかは、誰一人その光を仰ぎ見ることはできませんでした。あなたの秘義をほんの少しでも理解させていただくために、自分の無知をわきまえ、へりくだることを教えてください。この恵みをマリアの取り次ぎによってあなたにお願いします。マリアは、神の秘義を直接には知らなかったにもかかわらず、深く信じ、私たちに先立ってあなたの栄光の直観的知識に達した方だからです。」

前回、ヨブに耳を傾けたわたしたちは、今度はその相手の神に耳を傾けましょう。それは、神の秘義の理解の一歩となるでしょう。そのために、ヨブ記の３つの部分を取り上げます。

自分を知っていると認められないヨブ

ヨブ記９章は３人目のヨブの友人シュア人ビルダドがヨブを慰めようと思って述べた言葉への答えです。ビルダドは「神の正義を決して疑うことはできない。そして神が正義である以上、悪人は罰せられ、善人は報いを受ける」と強調します。それならばヨブは安心していられるはずです。ビルダドの意見に対してヨブはすかさずこう言います。

「それは確かにわたしも知っている。神より正しいと主張できる人間があろうか。」（９：２）

「わたしのような者がどうして神に答え　神に対して言うべきことばを選び出せよう」（９：14）

しかしヨブの確信は、悩ましい疑いに変わり始めます。神に絶対的な道理があるので、わたしの道理など認めてもらえないのではないか・・・。この節からヨブは自分自身を疑い始めます。「わたしは一体何者なのか？」「わたしには道理があるのか？　それともないのか？」　ヨブのことばは、苦悩にある人の態度を特徴づけるものです。ヨブは自分を知っていると認められません。自分は正しいと確信はしていても、そうだと肯定してくれる者が欲しいのです。しかし、いないので不確実さがヨブをいらだたせます。

「わたしの方が正しくても、答えることはできず／わたしを裁く方に憐れみを乞うだけだ。しかし、わたしが呼びかけても返事はなさるまい。わたしの声に耳を傾けてくださるとは思えない。
神は髪の毛一筋ほどのことでわたしを傷つけ／理由もなくわたしに傷を加えられる。息つく暇も与えず、苦しみに苦しみを加えられる。力に訴えても、見よ、神は強い。正義に訴えても／証人となってくれるものはいない。わたしが正しいと主張しているのに／口をもって背いたことにされる。無垢なのに、曲がった者とされる。」（９：15～20）

21 節では悲劇的な問いかけをしています。

「無垢かどうかすら、もうわたしは知らない。生きていたくない。だからわたしは言う、同じことなのだ、と／神は無垢な者も逆らう者も／同じように滅ぼし尽くされる、と。罪もないのに、突然、鞭打たれ／殺される人の絶望を神は嘲笑う。この地は神に逆らう者の手にゆだねられている。神がその裁判官の顔を覆われたのだ。ちがうというなら、誰がそうしたのか」(9：21～24)

ヨブの悲痛は頂点に達します。もはや何も分からなくなりました。自分が何者かさえわかりません。自分が正しいと感じてはいても、正義と不義の違いがどこにあるのかがわかりません。もう自分に説明ができなくなりました。自分のアイデンティティを失い始めています。「なぜ、自分がこうなったのか？」わかることができたらいいのにそれがわかりません。

ここで取り上げられているのは、究極的な例のようですが、比較的よく起こる状態を表しているのでしょう。アイデンティティに関わる悩みは、多くの人を苦しめています。仕事内容がはっきりしている人は、自分の義務が分かります。それに反して親という身分には、つとめがはっきりしないのでこれでいいのかと悩みます。司牧者についても同様です。うまくことが運ばない時や、期待したほどの評価を得られない時、「せめてこれでいいのかどうか？　わかればいいのに・・」と成果や役割の不明瞭さに苦しみます。自分についての確信がないと悲しく不安定な状態に陥り、徹底的に判定して欲しいと望み始めます。自分のしていることを全面的に認めて欲しい、そんな気持ちをヨブは代表しています。

知恵はあらゆる理解を越える

自分を全部知ることはできないことを受け入れられないヨブ。これまでのトーンとは異なる不思議な 28 章を読みましょう。28 章では**未知の人物が登場して神について語っています。**
実際には神の知恵をほめたたえる賛歌ですが、人間は神の知恵を知らないことが強調されています。

「銀は銀山に産し／金は金山で精錬する。鉄は砂から採り出し／銅は岩を溶かして得る。人は暗黒の果てまでも行き／死の闇の奥底をも究めて鉱石を捜す。」（28：１～３）

「食物を産み出す大地も／下は火のように沸き返っている。鉱石にはサファイアも混じり／金の粒も含まれている。猛禽もその道を知らず／はげ鷹の目すら、それを見つけることはできない。獅子もそこを通らず／あの誇り高い獣もそこを踏んだことはない。」（５～８）

テキストは詩情豊かな美しいイメージを続けますが、人はすべてのものには到達できるが、知恵にだけは到達できない、と断言します。
「では、知恵をどこに見いだされるのか？　分別はどこにあるのか？ 」　(12)
以下に「否定」が続きます。

「人間はそれが備えられた場を知らない。それは命あるものの地には見いだされない。深い淵は言う／「わたしの中にはない。」海も言う／「わたしのところにもない。」 知恵は純金によっても買えず／銀幾らと価を定めることもできない。オフィルの金も美しい縞めのうも／サファイアも、これに並ぶことはできない。金も宝玉も知恵に比べられず／純金の器すらこれに値しない。さんごや水晶は言うに及ばず／真珠よりも知恵は得がたい。クシュのトパーズも比べられず／混じりない金もこれに並ぶことはできない。」（13～16、以下 19 まで参照）

興味深いのは、知恵は見つからない、買うこともできない、売ってもいないことをとても強調していることです。その後に「では、知恵はどこから来るのか、分別はどこにあるのか」（20）という問いが続きます。答えは相変わらずです。
「すべて命あるものの目にそれは隠されている。空の鳥にすら、それは姿を隠している。
滅びの国や死は言う／「それについて耳にしたことはある。」」（21～22）
そしてついにこの章全体のかぎが与えられます。
「その道を知っているのは神のみ。神こそ、その場所を知っておられる・・・・。」（23 以下も参照）

結論
「そして、人間に言われた。『主を畏れ敬うこと、それが知恵。悪を遠ざけること、それが分別。』」（28）

神について言われる「のみ」「こそ」がとても素晴らしいと思います。「ただ、のみ、ただひとり」ということばは、聖書の中で神を感じとる時を代表するものだからです。「ただひとり驚くべき大きなみ業を行う方」（詩編 136：４）
彼ひとり天を造られた。「平和のうちに身を横たえ、わたしは眠ります。主よ、あなただけが、わたしを確かなところに休ませてくださるのです」（詩編 4：9）
聖書の中の、神が唯一である深い洞察は、神のうちにのみ、わたしたちの休息、救い、平和があるという主張を伴っています。

28 章には、大切な前進の一歩があります。人間は自分を知らないし、自分を知り尽くさせて欲しいと要求することもできません。神にだけ自分の正しさ、自己認識、ありのままの自分を委ねられるのです。自分をとらえたい、知りたい、正しい者だ、まともな人間だ、と確信を得たいヨブの不安におぼろげな答えが与えられています。

神の答え

38 章と 39 章**では神ご自身が語り始めます。**いよいよ、神のおことばに移りましょう。主は、いつも穏やかに少しもうろたえることなくヨブの訴えに耳を傾けておられました。愛と慈しみをもって関わってくださいました。
「主は嵐の中からヨブに答えて仰せになった。」（38：1）　この神の顕現は、エリヤが近き難い神の秘義をどれだけか悟らせていただいた時を想像させてくれます。
ヨブも矢継ぎ早に神に質問を浴びせましたが、今度は神が滝にも似た質問を浴びせヨブに答えてくださいました。
「これは何者か。知識もないのに、言葉を重ねて／神の経綸を暗くするとは。男らしく、腰に帯をせよ。わたしはお前に尋ねる、わたしに答えてみよ。わたしが大地を据えたとき／お前はどこにいたのか。知っていたというなら／理解していることを言ってみよ。誰がその広がりを定めたかを知っているのか。誰がその上に測り縄を張ったのか。基の柱はどこに沈められたのか。誰が隅の親石を置いたのか。そのとき、夜明けの星はこぞって喜び歌い／神の子らは皆、喜びの声をあげた。そのとき、夜明けの星はこぞって喜び歌い／神の子らは皆、喜びの声をあげた」(2～7)
「お前は海の湧き出るところまで行き着き／深淵の底を行き巡ったことがあるか。死の門がお前に姿を見せ／死の闇の門を見たことがあるか。お前はまた、大地の広がりを／隅々まで調べたことがあるか。そのすべてを知っているなら言ってみよ。」（16～18）

尋問はこの章の終わりまで続き、次の 39 章の 2 節にまで及んでいます。神は、究極的な意味を人間には理解できていないことを描いています。

黙想の手ほどき
１つの糸口です。たとえば、大自然が神の奥義を啓示できるか否かということ、自然から出発して神について語れるか、という視点です。特にエコロジーという大きなテーマと関連して「創造された世界の中に現存する神を私たちはどう考えたら良いか？」という点です。これも大きなテーマですが、今回は別の方向から考えます。ヨブが自分の知識の限界を受け入れなかった点に絞ります。この点が、ヨブ記の教えの中でとても大切だと考えるためです。

１．わたしには宇宙に精通することも神や教会の計画を知り尽くすことはできません。それどころか、わたしの責任をすべて知り尽くすことさえできないことを受け入れる必要があります。それは辛いことかもしれません。けれども、本当の賢さとはまだ自分の知らないことがある現実、すべてを知ることは不可能であること、科学についても現実のある一面を知っているに過ぎないことを認めるべきです。
　現実はおろか未来まで予測したいとさえ望むことは誘惑でしょう。この誘惑は善悪の木の実を食べたい、と望んだ大昔の誘惑に連なっています。神の秘義、神の計画、教会の神秘のかぎが欲しい・・・しかし本当の知恵は、人間の限界を受け入れることから始まります。

２．自分自身さえ全面的に知ることができない、と認めなければなりません。パウロが述べているように、誰かに悪を行ったやましさがなくても、そのためにわたしが義とされるわけではありません。わたしを義としてくださるのは神です。（１コリ４：3～４参照）

わたしの人生についても、完全に知っているのは神だけです。このことを悟るのは、ヨブにとっても誰にとっても難しいのです。けれども、心の平和を望むならどうしても本当の知恵を身につける必要があります。

３．自分自身について、最先端の技術でさえ神に委ねなければなりません。この委託を通してはじめて、自分や他の知識から役に立つことを引き出せるのです。そうであっても、秘義を全部知ることはできません。

具体的応用

黙想のポイントを生活に応用できるように３つ紹介します。

１．教会の実りは神のみ手の中にあります。司牧計画の結果も、私たちには見当もつかない、不測の出来事に依存します。その原因は神だけがご存知です。私たちに求められるのは、持っている知識を謙虚に用いることです。結果が予想を上回っても原因は神です。間違いが明らかになったり見直しを迫られたりするときには、それを受け入れることです。

「主よ、あなただけが、わたしを確かなところに休ませてくださるのです」（詩編４：9）という詩編の言葉の「あなただけ」を心に留めて、正直・誠実・能力を尽くす必要があります。

２．司牧にあたり、社会科学の助けを求めることがありますが、ある哲学者はこう述べています。「すべて自分たちで全て計画して運用しようとする企画万能主義があります。これに対して、**ものごとをあるがままに受け入れて、なすべきことを推し量る態度が大切です**。すべてを知るどころか自分自身でさえ把握できない、自分が果たして善を行っているのかさえ確実に知ることはできない、とわきまえることが大切です。任務の責任が重ければ重いほど、私たちがしていることの善さを保証してくれるものはない、と思うべきでしょう。神だけが、永遠の世界でそれを告げてくださるでしょう。

ヨブは、自分についても他人についても神についても明快に知りたいと望みました。そこで神は反論なさいます。「わたしが大地を据えたとき、お前はどこにいたのか。知っていたというなら、理解していることを言ってみよ。」　基本的にはヨブは正しいですが、神のみ前でのあるべき状態に引き戻されます。それは、私たちのための教訓です。

３．秘義に対して愛に満ちた尊敬の態度を持ちましょう。たとえ死の陰の谷を行くとしても、どのような悪も恐れません。あなたが共にいてくださるからです。これは聖書では根本的な態度です。確かに私たちはとても複雑な状況に生きています。そんな中で、簡単にどれが正しく、どれが正しくないのか見分けることはできません。神の秘義は、混乱と不条理に満ちた世界を導き、その場に

応じて、希望をもってささやかな役目を見つけられるようにはからってくださいます。どのような希望かと言えば、もし私たちが間違いを冒してしまうとしても、神は私たちをゆるし、一致へと導き、愛を育ててくださるということです。こうすることで、責任の重い事態に決定に臨めるのです。神の秘義は、私たちを**一層愛を込めて行動するように連れ戻すのです**。ヨブ記を学ぶことで、正しく的を得た解決ではないとしても、より不正が少なく、現在よりもましな策を見出すことができるでしょう。

ヨハネ 23 世の『魂の日記』にこうあります。「年を重ね経験を積みながら成熟していくに従い、自分自身の聖化と教皇庁への奉仕で成功する一番確実な方法が見えてきました。それは、目標・事務手続きなど、最高に簡素で穏やかなものにすることだと思う。そのためには、自分の葡萄畑の無駄な葉っぱやつるをよく剪定し、真理・正義・特に愛を大切にすることである。この他のやり方はみな、見せかけや自己主張に過ぎず、そのうちに化けの皮が剥がれ、厄介で滑稽なものになってしまう。」

『キリストに倣いて』『聖フランシスコの小さき花』『聖グレゴリオのモラリア』などのすぐれたページはなんと簡素なことか。この世の賢者とかやり手は、イエスや聖人が残した偉大な教訓に比べると、なんとみすぼらしく見えることか。簡素な中に、気品と喜びを持って生きる恵みを願いましょう。

振り返りの質問

Q. 神様からいただいたと感じる自分の取り柄は何でしょうか？　自分がよく陥る困難は何でしょうか？

Q. 神との対話の中で、神は私をどのように造られ、どう育って欲しいと望まれていると感じますか？

Q. 神だけに信頼する、委ねる体験があるでしょうか？　また、信頼しきれない、委ねきれない体験があるでしょうか？

Q. 自分を愛に立ち戻らせる体験やみ言葉があるでしょうか？

Q. 自分の生きる信条をシンプルに表現するみ言葉・祈りがあるでしょうか。それから力を得てきたでしょうか？

知性の従順のための戦い

今回の講話は、ヨブ記全体に関するものです。テキストが日常生活にどんな意味があるのかのかの解説です。具体的な聖書箇所には触れません。「あなたがたは、わたしが種々の試練にあったとき、絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた」というイエスのことばを霊操のテーマに選んだとき、信仰生活で見過ごされがちな面、知性を制御し“知性の従順”に達するための戦いに光を当てたい、という望みがありました。この問題は、ヨブ記のなかで見事に例証されています。ヨブ記全体は、知性を神に服従させようとして、人間が取り組む大変な戦いです。

まず**「信仰による従順」**ということばを理解しましょう。次に**「知性の混乱」「知性の不従順の様々な形態」「ギリシア教父の教える知性の浄化」**を考えます。最後に、生活に適用する結論です。
「マリアさま、あなたは最初から清められた従順な知性と理解力をもっておられました。『どうしてそのようなことが起きるでしょうか？』という素朴な質問をなさった後、あなたは落ち着きを取り戻し、それ以降、思い直したり恐怖に陥りはしませんでした。あなたのそのような道を、知性と心を静めながら私たちもたどって行けるようにして下さい。私たちの召出しに沿った方法で、隣人への奉仕と愛に尽くすことができますように。」

信仰による従順

パウロは次のように書いています。「私たちはこのかた（死んで復活した主イエス・キリスト）により、その名を広めて全ての異邦人を信仰による従順へと導くために、恵みを受けて使徒とされました。」（ローマ１：５）
信仰によって神の秘義に従うようになることは、パウロの使徒職の目的でした。また、聖霊の派遣の目的でした。聖霊が送られたのは、使徒たちが信仰による従順を体得できるように、彼らを励まし力付けるためでした。信仰による従順を持つようになることは、教会の目的であり、宣教の目的です。このテーマは新約全体の中心です。ローマ書の最後の栄唱は、このように繰り返されています。

「神は、わたしの福音すなわちイエス・キリストについての宣教によって、あなたがたを強めることがおできになります。この福音は、世々にわたって隠されていた、秘められた計画を啓示するものです。その計画は今や現されて、永遠の神の命令のままに、預言者たちの書き物を通して、信仰による従順に導くため、すべての異邦人に知られるようになりました。この知恵ある唯一の神に、イエス・キリストを通して栄光が世々限りなくありますように、アーメン。」（ローマ 16：25～27）

この考えは、ヘブライ人への手紙の中でも神の御子について「完全な者となられたので、ご自分に従順である全ての人々に対して、永遠の救いの源となり、神からメルキゼデクと同じような大祭司と呼ばれたのです。」（5：9～10）というときに言い表されています。イエスが私たちにとって救い主なのは、まさに信仰による従順と呼ばれる行為を通してです。

　それだけでなく、遠い昔の太祖たちが救われたのも神に従い神に聴くことによったのでした。「信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです。」（ヘブライ 11：８）
行き先を知らないままにさすらいの旅を最初の宿営地に向けて歩むアブラハムを想像してみましょう。どれほどの疑問の渦が頭に沸き起こったでしょう。「誰がこんなことをわたしにさせるのか。本当にこれでいいのだろうか。どうしてわたしは元いたところに留まらなかったのか。」などの疑問に答えるのは容易ではなかったでしょう。

信仰による従順は、一度だけの行為で済むものではありません。パウロによれば、信仰に逆らう人間の肉の思いなど、世俗的な誘惑に対する長期の戦いを続けなければなりません。

知性の秩序の乱れ

信仰による従順は、知性の秩序を乱すことへの勝利を前提にします。信仰に反しあるいはそれを乱すような妄想は信仰の歩みに反対しそれを妨げ、やがては信仰とは違う解釈をし、信仰を疑問視するようになります。これらは、ゲラサの悪魔つきの挿話に出てくる悪霊どもが言った通り、レギオン（軍団）をなしています。（マルコ５：１以下参照）
　真面目に信仰を歩み始めたいと望む人はそれによく気がつきます。けれども、小さくても飛び回る蚊のように、私たちが信仰に集中するのを妨げるもの、煩わしく頭をよぎるものから逃れることはできません。霊的生活を試みない人は、このようなことに気づかず、テレビやネットなどいろいろな情報にさまよいながら生活します。テレビ番組をあてもなく見続けながら、いつも何かの刺激の影響を受け続けている人と同じです。
　知性の秩序の乱れは、生活態度から判断できます。沈黙を守り、規則正しく黙想を始めるときに知性の秩序の乱れに気づきます。無益で虚しいものに襲わるたびに戦い続けなければなりません。この戦いは精神の健康条件です。空想、恐れ、自己陶酔、未来への逃避、回顧などの世界を本来の

姿に秩序づけるとき、内的な健康も促します。この戦いを怠ると、いつも様々な感情に翻弄されて方向づけができず、自分自身でも説明できないくらい気分が目まぐるしく変わります。知性の秩序の乱れとの戦いは、神に素直に従い、その業に自分を委ねようとする人に大切な働きです。

知性の不従順の種々の形態

気晴らしに逃げることが挙げられます。雑念によって右往左往され直接従順と争うことをしな句なり霊的な力が減少します。ヨブもその例です。言葉数が増えますが、多くは不従事に傾いています。私たちにも当てはまります。自分の置かれている状況に反抗する思い、家庭や生い立ちなどを受け入れられない、社会への不満がある、という考えになっていきます。私たちはこのような思いの中に含まれる悪と戦わなければなりません。現実離れした条件を夢見たり、空想にふけることにも戦わなければなりません。そのうちに愛や奉仕への意欲がそがれます。自分の誤りを認めない、ということもあります。どれだけ当てはまっているかは別として、批判を受けるときすぐに弁解の理由をいくつも挙げてしまいます。また、その場面を何度も思い出し、自分の方に道理があると言い聞かせます。

ヨブ記は、自分が何者であるかを知らない、自分が正しいかどうかもわからない、自分の任務をはっきりさせないと納得ができない、などの考えがもたらす危険を教えてくれました。このような思いは、神を受け入れない方へ進ませます。ヨブの知性は神を拒むように誘われ、もう何も信じない、何も受け入れられない、何もしたくない、否定的なあきらめ、そして絶望の誘惑までになります。

雑念の巡り方は次の通りです。最初は無害なものとしてあらわれ、目が覚めたときにもたげ、仕事から一息つくともたげ、やがて私たちの知性に侵入します。仕事を始めるとき、どうしてかわからないのに何となく悲しく、やる気がなく疲れを感じます。私たちは雑念を注意深く取り締まらず、抑えなかったからです。他者や自分自身への怒り、憂うつ、いら立ちなどが無意識の間に私たちの中に忍び込み、それを育ててしまってしまったのです。

肉欲的な空想をしてしまいます。知らず知らずに私たちの中に忍び込み、祈りに対する嫌気、ミサや教会の祈りに対する真面目さの不足など、ある種の虚しさが膨らみます。どうして雑念が湧いてきたのか理解できませんが、それをもてあそんでしまい、取り締まらなかった雑念が気がつかない間に気力を奪ってしまったのです。このような内面の動きを理解し、発見するのも霊的歩みの一部です。たゆみなく苦労の多い戦いを始めるように、私たちを導いてくれます。

教父たちの教えによる知性の浄化

東方教会の素晴らしい作品、特に隠修士の作品は知性の浄化のヒントをくれます。『フィロカリア』（三位一体論の基礎を作ったナジアンゾスのグレゴリオとバシレイオスが編集したオリゲネスの詞華集）の数巻は、知性と心情を取り締まるための戦いをテーマにしています。隠修士の難しさ

は孤独な生活に入るよりも、自分の内面の世界と対決することです。彼らの生活は、ひたすら自己の内面に従順になるための戦いです。

『フィロカリア』の各巻は、霊的で心理学的な英知に満ちていて、知性の取締りに関して長年にわたる伝統に私たちをあずからせてくれます。各巻の表題がとても意義深いです。隠修士イザヤの『理解力のまもり』、修道者エウアグリオスの『苦行と静穏をどのように訓練するかを教える修道生活概論』（静穏「エジキア」とは知性を掌握している人の平静を意味します。言い換えると、隠修士の生活の理想です。そのために隠修士たちが生涯を賭けて得ようと戦った内的な平和のことです）」、同じくエウアグリオスの『情欲と思考の識別について』、カシアノの大作は人間の気力を失わせるような邪悪な思いの仮面を剥ぐために戦い、情欲の正体を暴くのです。

興味深い多くのページからエウアグリオスが識別について書いている一節を紹介します。

「放浪者と呼ばれる悪魔がいて、特に暁のころ兄弟たちの前に姿をあらわし、隠修士の知性を町々、村々、家々へと案内するのだが、ありきたりの会話しかしない。」ですから悪魔は無害な仕方であらわれ、あの人この人のことを思い出させるように仕向けます。「やがてもっとゆとりをもって知人の誰かと出会い、出会った人によって内面の状態を堕落させる。次にもっと遠くまで足を伸ばし、少しずつ神について、徳について、誓った修道誓願についての知識を忘れてしまう。だから孤独であろうとする者は、この悪魔がどこから来るのか、どこに導こうとしているのか観察する必要がある。悪魔は目的なしに、ただ偶然にこのような遠回りを仕向けているわけではない。悪魔がそうするのは、隠修士の心の平和を台無しにするためである。いろいろなところで雑念の火をつけられ、多くの出会いに夢中になった隠修士の知性が、次第に邪淫、怒り、悲しみなどの悪魔の罠にかかるようになるためである。これらはみな、隠修士の内面の輝きをひどく損なうものである。」

勧め

いくつかのことを述べましょう。

１．私たちを襲う雑念の渦から合理的な仕方で抜け出したいと望むのはある程度正しいことです。１つ１つの思いに論理的な答えを与えようとする本能的な傾きをもっています。これらの思いは、質問の形を取ってあらわれます。

２．けれども守るべき限度があります。感受性がどんどん高まり、質問が目指すのは答えではなく精神を落胆させようと企んでいるのだとわかることがあります。そのときには戦いの警報を鳴らさなければなりません。心を穏かに保ち、秩序ある知性を守るために規律正しい態度を取らなければなりません。次の３つの具体的方法で知性を制御できます。

① **勇気をもって雑念の渦を断ち切ること**。たとえ道理にかなっている考えでも、建設的でないとか、知性の気力を失わせることに気づくなら、思い浮かんでいることを断ち切る必要があります。もし早めに手を打っていれば、どれほど多くの人が衰弱せずにすみ、苦い体験を避け、恨みによる決裂をせずに済んだでしょう。ですから、**心の中で決断することがとても大切**です。

② **『キリストに倣いて』**も勧めている方法です。今することを感覚まで動員して行います。本を読んでいるなら、本の重さを味わい、字面を１つ１つ目で追いながらそれらの活字を通してことばの意味をわかるように努めるのです。歌っているのなら心を込めて歌い、字を描いているなら精神を集中して書き、歩いているなら力いっぱい歩いてください。恨みやしこり、恐れ、苦悩などによって行動を支配したいと狙っている寄生虫のような雑念は、感覚を動員することで防げます。感覚を動員するのはとても素朴な方法に見えるかもしれませんが、この原則に基づく心理学派があるほどです。秩序ある自意識は、右往左往しないで目的に向かって集中するように知性を整えます。

③ ギリシア教父、砂漠の隠修士の伝統的教えで説かれる**「イエスの祈り」**です。この祈りは知性を心に移す、知性が考えの森をさまようのを許さず、知性を総動員し愛情を込めてイエスに自分を捧げ尽くすことです。心の祈りはそれなりのテクニック（具体的方法）があります。**ロザリオの祈り**もその１つです。よく唱えるなら知性を導くあることばに集中することで、心を落ち着けてくれます。**十字架の道行**は、イエスへの感情や愛情を誘います。**射祷や詩編のことば**を繰り返すうちに心の祈りになります。多くの思いが徐々に単純化され、１つにまとめられていきます。これらの祈りは、様々な活動で生まれる断絶や気晴らしを抜け出し、内的な統一を再発見する助けになります。一番お勧めなのは「イエスの祈り」です。この祈りは、誰でもできる祈りですが、とても深い神秘のうちに私たちを導いてくれます。多忙で濃密な祈りの時間をあまり取れない方にも実行できます。一定の時間に行う祈り・沈黙、忙しい中での祈り、両方が大切なのを私たちは知っています。

３．悟性の怒りです。これは隠修士イザヤの文章を引用して紹介します。

「激情の中に悟性の怒りというものがあるが、これは本性に基づくものである。」　ギリシアの伝統では「本性に基づく」とは「神による」ことを意味します。神がすべてを造られたからです。「怒りなしには、敵が人間に危害を加えようとして種まく考えに義憤を感じません。その人のうちに清さもあり得ない。」もしある考えが頭の中で渦巻くのをあまりに忍耐深く見過ごし、それを敵とみなさないなら、その人は真理を生きていけません。内的な清さに到達もできないでしょう。「ヨブはこのような敵に気づいたとき、友人たちのうちにあるこの敵をののしった。『名誉に値しない輩、軽蔑すべき者、何の善いところももたない者ども、お前たちには牧羊犬と並ぶ値打ちすらない』　もし悪魔が撒き散らした雑念に抵抗し、雑念が退散してのを見たからといって安易に喜んではならない。悪魔の悪意は、雑念の背後にあるからだ。雑念は最初よりも高等な戦いを準備し、伏兵を町に残している。だからもう雑念を全部追い払った、と気を抜くと伏兵と戻ってくる部隊との挟み撃ちにあう。そうなると逃げ場がない。雑念と戦い続けるエネルギーは、怒りを伴った祈りである。

隠修士イザヤは、刻々と変わる状況の中で生きる私たちが堅固な内面的規律に達したいならば、心の平和を乱そうとする輩に憤りを覚えるべきだという。けれどもその際、人間の思いを超え、あなたに平和をお与えになる主イエスをしっかりと見続けることが大切です。ヨブが長く辛い労苦と

骨折りを経て到達したのは、この知性の従順です。私たちの司牧的奉仕にとっても大切なゴールです。早く主が到達させてくださいますように。

振り返りの質問

Q. 知性の従順とは、自分の言葉で言うとどうまとめられるでしょうか？

Q. 自分が心の平和を奪われやすいのはどのようなところでしょうか？　また、心の平和に戻るにはどうしているでしょうか？

Q. 隠修士の言葉から、霊的戦いのためのヒントを何か得たでしょうか？　どの言葉が心に残りましたか？

Q. 悟の怒り、正しい怒りに心当たりあることはありますか？

ことばに言い表せない神の正義（年間 20 週の水曜日の説教）

年間第 20 週水曜日のミサの説教　第 1 朗読　士師記 9 ： 6 ～15 マタイ　20：1～16

第一朗読は、王政に対する最初の不信の例です。すべての権限を一人の人間に託すことへの不信の表現です。このたとえには、人間の役に立つ木々、オリーブ、ブドウなど、能力があり真面目で、人に貢献するものが登場します。それらは「自分には固有の使命がある」と主張して王になってくれません。この依頼を引き受けるのは、実を結ばない、役に立たない“いばら”です。

たとえ話が言いたいのは、本当に賢い人は自分の本分の領域で行動しますが、反対に知恵を持たない人は、このいばらのように、他人の上に立つことを望みます。責任を軽々しく引き受け、権威を持ってしまうと虚栄心の強い残酷な支配者になるということです。

人間の運命は神のみ手の中にあり、それを一人の人間に委ねるのは良くないことを学びましょう。「主よ、あなただけが私を確かなところに憩わせてくださいます。」　ですから、この不信は、ある人に運命を委ねると権力を濫用し、神の民を弾圧する恐れがあるということです。列王記の語る歴史は、このような恐れが的を得たものであることを示しています。この恐れは、救いの歴史をも覆っています。

救いの歴史は教会によって展開されますが、ある人物に牧者のつとめを任せるにしても、彼らは僕に過ぎず、その上にはイエスという唯一最高の牧者がおられることを肝に銘じるべきです。全ての信徒に対する全面的な責任を持っておられるのはイエスであり、他の全ての人間はキリストに依存する第二、第三の統治者に過ぎません。牧者たちは、ことがうまく運ぶように心を配らなくてはなりませんが、神の民の希望と信頼はいつも主にあることを念頭にすべきです。私たちが行う一切のことは主であるキリストと、その方の権威に基づいています。

マタイ 20：1～16 までに記されているイエスの話は、ヨブ記の筋と重なります。この話でヨブを演じるのは、ぶどう園の労働者です。彼らは、雇い主が時間給のような正義を行使しないことに不満をこぼしています。それはある面、正しいことです。しかし、雇い主はあらかじめ相当の賃金を払うと約束しています。早く働き始めた労働者は、いつの間にか労働時間に対する賃金を要求するように変わってしまいました。ヨブは、このような正義の代表です。一義的には正しいですが、人の意表をつくような神のなさり方がわかっていません。ヨブは回心しなければなりませんでした。神は、いつも新しいかたちで、ことばに尽くせない神秘的な仕方で自由に働く愛です。人間の想像をはるかに超える善いお方です。私たちは神の正義に基づいて行動するように導かれています。神はときに型破りな方法を取られます。愛と慈しみがほとばしるからです。この神の秘義に身を委ねていきましょう。

ミサは、聖体の秘義です。両の手にキリストの御体と御血を捧げ持つたびに、私たちは戸惑います。なぜなら聖体は、私たちの概念の器には入りきれず、私たちの予測や計算をはるかに上回れる愛の証だからです。貧しく限界のある私たちがいくら考えても、聖体の秘義の深さには到底及びもつきません。聖体の愛は、人智をはるかに越えるからです。

６．神との戦いの３つの様式

ヨブ記も聖書の一巻なので、そのメッセージは聖書全体のメッセージと合わせて解釈することが大切です。私たちの読書の輪を広げて新旧両約のいくつかのページから読んでみます。

ヨブは最終的に、神の秘義の前に頭を下げました。知性の乱れと戦いながら、ヨブは神とも戦いました。ヨブは、自分は神から祝福され、義と認められ、正しいと宣告を受け、望んでいるものを手中にしたいと強く願いました。このように神との戦いというテーマは、聖書の中にたくさんありま

すが、あまり私たちは取り組んでいません。その理由は、これがキリスト教的神秘主義に関するテーマだからです。神との戦いは、私たちに関わることなので、今回は深めることにします。3つの箇所から考察します。

創造主に対する被造物の弁論（ヨブ記10章）

「ヨブは神も臨席しておられる架空の裁きの座を想定し、そこで行う弁論を導入しているものと思われる」　この弁論演説は次のように区分できます。

1～2節　弁論の開始（緻密な論争に入るための導入）

「わたしの魂は生きることをいとう。嘆きに身をゆだね、悩み嘆いて語ろう。神にこう言おう。「わたしに罪があると言わないでください。なぜわたしと争われるのかを教えてください。」

3～7節　5つの質問で始まります。ヨブが神を説得しようと試み、立て続けに質問します。ここでは、なぜ神は私に慈しみを示してくださらず辛く当たるのか、という問題です。

「手ずから造られたこのわたしを虐げ退けて／あなたに背く者のたくらみには光を当てられる。それでいいのでしょうか。あなたも肉の目を持ち／人間と同じ見方をなさるのですか。人間同様に一生を送り／男の一生に似た歳月を送られるのですか。なぜわたしをとがめ立てし／過ちを追及なさるのですか わたしが背く者ではないと知りながら／あなたの手から／わたしを救いうる者はないと知りながら。」

8～12節　法廷での弁論演説のように、自己弁護の熱弁に変わっていきます。

「御手をもってわたしを形づくってくださったのに／あなたはわたしを取り巻くすべてのものをも／わたしをも、呑み込んでしまわれる。心に留めてください／土くれとしてわたしを造り／塵に戻されるのだということを。あなたはわたしを乳のように注ぎ出し／チーズのように固め 骨と筋を編み合わせ／それに皮と肉を着せてくださった。わたしに命と恵みを約束し／あなたの加護によって／わたしの霊は保たれていました。」

契約についての言及はありませんが、ヨブの言葉の底には契約の秘義を読み取れます。あなたは私を形造ってくださり、あなたのものとして下さった。私はあなたのもの、どうか私を近くに置いてください。私を見捨てないでください、という嘆願です。

13～17節　熱弁に続くのは、敵対者として振る舞う神への告発です。

「しかし、あなたの心に隠しておられたことが　今、私にわかりました。」

この告発は非常に重要です。「人間は神秘的だが厳しい方に支配されていると感じ、自分自身についても、神についても不安定な状態に置かれ、良心が試みられ、自分が拠り所としている保証を拒

まれたように感じている。否定的な形でヨブは信仰のドラマを想起させている」（エルサレム聖書脚注 P105 一部表記を変えています）　ヨブの言葉は、解明したくても仕切れない不確かさに直面するときの人間の神秘の一面を表現しています。

14～17 節　神はあたかも哀れな人間を襲う猛獣のように見なされています。
「もし過ちを犯そうものなら／あなたはそのわたしに目をつけ／悪から清めてはくださらないのです。逆らおうものなら、わたしは災いを受け／正しくても、頭を上げることはできず／辱めに飽き、苦しみを見ています。わたしが頭をもたげようものなら／あなたは獅子のように襲いかかり／繰り返し、わたしを圧倒しわたしに対して次々と証人を繰り出し／いよいよ激しく怒り／新たな苦役をわたしに課せられます。」

18～22 節　再び攻撃から嘆願に移り、秘義に満ちた神の愛情に訴えようとします。
「なぜ、わたしを母の胎から引き出したのですか。わたしなど、だれの目にも止まらぬうちに／死んでしまえばよかったものを。あたかも存在しなかったかのように／母の胎から墓へと運ばれていればよかったのに。わたしの人生など何ほどのこともないのです。わたしから離れ去り、立ち直らせてください。二度と帰って来られない暗黒の死の闇の国に／わたしが行ってしまう前に。その国の暗さは全くの闇で／死の闇に閉ざされ、秩序はなく／闇がその光となるほどなのだ。」

この 10 章でヨブは自分の孤独、不安、悲しさを訴え、ひどい劣等感に悩む人のように絶望し、いら立ちを見せ、何としても自分の望むことを手に入れようと神と戦っています。神は、自分が願っているものを与えることができ、当然そうするべきだと考えています。
ヨブは神と戦ってはいますが、自分自身が節度のない思い、不安とも戦っています。この不安はヨブの内側からさいなみ、人への脅しのことばを使ってでも、何とかそこから逃れようと焦っています。激しい言葉で攻撃する人は一番もろい人で、望むものを手に入れられないのを恐れて他人にむきになるのです。

マリアとイエスの戦い（ヨハネ２章）
ヨブの神との戦いと照らし合わせてカナの婚宴を読み、イエスの御母マリアがどのように戦われたかをみましょう。マリアは、自分が今望んでいることは「きっと叶えられる」と思っていますが、必ず希望通りになるかはわかりません。それでも、出来る限りのことをします。その戦いはとても節度のある控え目な言葉で表現されていますが、神との戦いであることに変わりはありません。
　まず最初に、マリアは新郎新婦を支える立場でイエスに事情を話します。とても短いですが迫力のある言葉で嘆願されます。「ぶどう酒が足りなくなったので、母がイエスに『ぶどう酒がなくなりました』と言った。」（ヨハネ２：３）

心のこもった言葉です。あなたも出席しているし、私もここにいるのにどうして助けないでいられましょう？　このままにしておけば、これからの結婚生活が暗い影を落としかねない、という思いでしょう。

イエスはと言えば、マリアを孤独に放置しておられるかのようです。「イエスは母に言われた。『婦人よ、私とどんな関わりがあるのです。私の時はまだ来ていません。』」（4節）
イエスの真意は分かりませんが、確かに歓迎とか励ましのニュアンスより、距離を感じさせる言葉です。

マリアは助けを得られず、ヨブのように孤独です。けれどもマリアは、類まれな信頼の行為をされます。彼女は、自分だけでなく他人をも巻き込みます。召使達を呼んでこう言われます。「この人が何か言いつけたら、その通りにしてください。」（5節）　マリアは人を巻き込んでまで、イエスの同意を得ようとします。マリアの気持ちは、恐れとかプレッシャーによるのではありません。いらだったり叫んだりする必要がなく、むしろ聞き入れてくれることを期待しています。信頼を込めて自分と召使達をイエスの権能に委ねられます。マリアには、はっきりとわからないにしても「イエスがきっと何かしてくださる」とわかっていたかのようです。

カナの婚宴の物語に、マリアの名はこれから先出てきませんがマリアのイエスへの委託の心はずっと保たれていました。御子イエスが一見、期待に反する行動をとっても、彼女は委ね続けます。２ないし３メートレスも入る６つの石の水がめにイエスが水を満たすように、とイエスは召使に指示しますが、まるで「もしぶどう酒がないなら、水でも飲めば良い」とでも言いたげです。イエスがマリアの願いを真面目に取り上げてくださらなかったようにも受け取れます。カナの婚宴の奇跡は、どんなことも戦う必要がある、粘り強く頼み続ける必要がある、窮地に追い込まれてもまだ信頼を保ち続ける大切さをマリアを通して教えています。この信頼は、知性の従順の戦いを勝ち抜いた者ならではのものです。

私たちにも神との戦いがあります。霊的歩みの中で、信じる者が神のみ前で取るべき大事な態度が知性の従順です。ヨブではなくマリアの方に近づくように努力したいものです。

カナンの女性の戦い（マタイ 15：21～28）

もう一つ、とても美しい神との戦いを制したカナンの女性の物語を考えます。この女性は、自分が選ばれた民の一員ではないことを自覚しています。自分にはして欲しいことを主張する資格がないことがわかっています。それでもなんとか自分の願いをイエスに聞き入れてもらおうと、自分をかなぐり捨ててイエスの前に飛び出します。

「すると、この地に生まれたカナンの女が出てきて、『主よ、ダビデの子よ、私をあわれんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています』と叫んだ。」（22節）　この訴える力に注目しましょう。嘆願するにあたって「ダビデの子よ」と呼ぶことで、伝統の源で、イエスになじみ深く、彼のうちに眠っているメシアに関わる神との約束の力に訴えています。また「主よ」と呼んでいますが、この呼び名は神の全能の神秘を開いて見せる何かを含んでいます。「私をあわれんでください」という言葉と、娘が体験している苦しみの描写にはあわれみの心を引き出すものがあります。効き目のある、心のこもった訴えです。

母親と娘が全く１つになっていることも素晴らしい点です。「私をあわれんでください」とあります。苦しんでいるのは娘ですが、私も一緒に苦しんでいます。ですから、私があなたにあわれみをお願いしています、という態度です。

それでもイエスは耳を傾けられず、たった一言も声をかけてくださいません（23 節参照）　カナンの女は深い孤独と見捨てられた気持ちを味わいますが、希望を叶えてもらうために一層真剣に戦いに挑みます。弟子たちはイエスに「女性の話を聞いてやってください。後からついてきて叫ぶのが見えませんか」私たちが困ってしまいます、とでも言いたげです。この戦いで勝利を得るために弟子たちを味方につけたかのようです。

しかし「イエスは、『私はイスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない』とお答えになります」（24 節）　返答は決定的なものに見えます。イエスがご自分の使命の線引きをされたのですから。もしこの時点で女性がヨブのように知性の不従順に陥っていたら、神のなさり方を呪い始めたに違いありません。神の計画がイスラエルの民という、１つの民族の小さな枠を出ないように見えたからです。そして、神をののしり始め、攻撃的になったかもしれません。

しかし反対にカナンの女性は、主のみ前に平伏し「主よ、どうかお助けください。」（25 節）と言います。戦いは続きます。彼女はイエスのお言葉が普通に意味する範囲を超えて、あわれみの世界に入ることを確信しています。直観によって彼女はこう言っているようです。「私はあなたを存じあげています。あなたは私を助けることができます。内心そうしたいとお望みです。あなたはつれない態度で私を試しておられるのです。」　彼女は試みを体験し、信仰の清めの機会をいただきます。この試みを謙虚に、決然と、穏やかに生き抜こうとします。

けれども３度目もとても辛いやり方ではね返されます。「子どもたちのパンを取って子犬にやってはいけない」（26 節）　民族差別を含む侮辱的な言葉が、反抗心をかき立ててもおかしくありません。女性と神との戦いは頂点に達します。しかし、女性はイエスを呪ったり、食ってかかる代わりに、知性の従順を崩しません。ユーモアさえ含む自由で信頼に満ちた態度を示します、「主よ、ごもっともです。しかし、子犬も主人の食卓から落ちるパンのクズはいただくのです。」（27 節）

彼女の答えはとても崇高で、イエスの方が一本取られたかのようです。イエスに信頼を置き、神のあわれみに心から信仰を置く者の言葉です。こうして彼女は戦いに勝利しました。イエスは、彼女に勝利して欲しかったのです。神との戦いの神秘は、ヤコブに負けてみ使いは満足したところにあります。（創世記 32：23 以下参照）　あるラビは「神はご自分の子らによって乗り越えられたり、負かされたりするのを喜ばれる」と言っていますがその通りです。

喜びの言葉がイエスの口から出ます。「婦人よ、あなたの信仰は立派です。あなたの願いどおりになるように。」（28 節）　彼女は本当に立派です。目で見えないキリストの愛を見通したのですから。　並行箇所のマルコにはこうあります。「それほど言うなら、よろしい。家に帰りなさい。悪霊はあなたの娘からもう出てしまった。」（マルコ７：29）　この女性の言葉には力がありました。イエスが喜ばれたのは、この奇跡が自分の力というより、人間の信仰の力によったからでしょう。カナンの女性は、太祖アブラハムの信仰のレベルにまで高められたのでイエスの勝利でもあります。

もし、カナンの女性がイエスの態度にののしっていたらどうなったのか、何度か考えました。主は確かに、奇跡を拒む者に奇跡をおこなうことはなさいませんが、それでもイエスはこの場合、彼女の真意をつかんで癒されたように思います。もし女性が、ヨブのようにイエスをののしっていたら彼女の信仰のレベルは下がり損をしていたでしょう。けれども実際は、違った。彼女は知性の従順によって高いレベルに上がりました。私たちは、損をしてないでしょうか。マリアとカナンの女性から学ぶ点は多いです。

神と戦う私たちの能力

３つの聖書箇所を愛のこもった気持ちで読み返しましょう。神と戦うわたしたちの力はどの程度でしょうか？　簡単に落胆するでしょうか？　心の奥底で疎まれているとか顧みられてないと感じているでしょうか？　それともマリアやカナンの女性の模範に倣おうと努めているでしょうか？　彼女たちは、アブラハムに始まった人類の歩みの頂点に達するために、神に挑戦し、困難との戦いの中で信仰を育て、闇の中でも神に叫びをあげました。神の奉仕の無償性を火で試される時も受け止めました。

神の愛によって創造され試練に招かれた人間は、信仰の挑戦を受け入れることを知りませんでした。根本的な罪は、神に委ねることを知らず、神の言葉の指導を頼ることを知らないことです。そこで神はアブラハム以来、信仰の道を通して人類を再建なさいました。こうして信仰は旧約の全ての偉大な人物を通して清められ、ヨブ記では不可解な例を得て、マリアの信仰と新約の聖人たちの信仰に合流して、ついに御父に対するイエスの委託に合流します。御父がイエスを真っ暗な孤独に放されたように見えた時にも、イエスは完全な神への委託を貫き通されました日々の戦いでこのような救いのビジョンに私たちも入りましょう。

振り返りの質問

Q.　３つの神との戦いから、何か霊的なヒントを得たでしょうか？

Q.　完全な神への委託に憧れる機会があるでしょうか？　誰の委託を思い描くでしょうか？

７．知性の従順の３つ規範

ヨブ記を頭におきながら、キリスト論的なヒントを与えてくれる３つの聖書の箇所から考えます。
アブラハム（創世記 22 章）ヨブ（ヨブ記 40～42 章）イエス（マルコ 14 章）です。
黙想を始める前にヘブライ人の手紙からインスピレーションを得ましょう。

「こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびただしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか、信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。このイエスは、御自身の前にある喜びを捨て、恥をもいとわないで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。あなたがたが、気力を失い疲れ果ててしまわないように、御自分に対する罪人たちのこのような反抗を忍耐された方のことを、よく考えなさい。」（ヘブライ 12：1～3）

信仰の創始者であり完成者であるイエスは大きな試練を経験された方です。試練の頂点に十字架の恥辱がありました。イエスは、兵隊たちの暴力、人々から辱められながら試練を受け続けました。このことは私たちを励まします。信仰の証人の大群に見守られ、忍耐強く走り抜く支えとなります。信仰の証人の大群とは、新旧両約の聖人たちの群れです。特にヘブライ人の手紙に記されている聖人たち（１１章参照）の中で際立つのはアブラハムです。

「イエスよ、どうか私たちがあなたを見つめる恵みを与えてください。あなたこそ、信仰の源で、それを完成に導く方です。私たちに先立って試練の道を走り抜いた方、たとえ道に迷っても正しい道に連れ戻してくださる方です。私たちが深い愛情をもってあなたを観想し、難しい選択の時もあなたに従う力をお与えください。」

アブラハムの従順

「これらのことの後で、神はアブラハムを試された。神が、「アブラハムよ」と呼びかけた。」（創世記２２：１）

これは、アブラハムの生涯の決定的な瞬間、信仰とは何かが伝わる神秘的な場面です。十字架上のイエスにも「その御子をさえ惜しまず死に渡された」（ローマ８：32）とあるので、アブラハムとイサクの関係は、御父と御子の間にも当てはめられるほどです。

神はアブラハムを試みられます。アブラハムを名指しで呼びながら言われます。
神は命じられた。「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。わたしが命じる山の一つに登り、彼を焼き尽くす献げ物としてささげなさい。」次の朝早く、アブラハムはろばに鞍を置き、献げ物に用いる薪を割り、二人の若者と息子イサクを連れ、神の命じられた所に向かって行った。（創世記２２：2～3）

辛い犠牲をアブラハムは求められているのに、とても簡潔に語られていているのは驚くほどです。まるで全てがあらかじめ決まっていたかのように進みます。神が命じると、アブラハムは従い、朝早く起きて出かけます。

けれども、アブラハムの脳裏に渦巻いた戦いはどれほどだったでしょう。強い反発、やるせなさ、怒り、悲しみを感じたことが想像できます。創世記は、アブラハムの内面を描いてはいません。しかし、ヘブライ人への手紙では語られています。

「信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクを献げました。つまり、約束を受けていた者が、独り子を献げようとしたのです。この独り子については、「イサクから生まれる者が、あなたの子孫と呼ばれる」と言われていました。」（ヘブライ 11：17～18）

ここには、アブラハムが味わわなければいけない内面の戦いが要約されています。まさか自分にこの命令が下るとは・・・。契約の恩恵を受けるはずの私、この子を何年も待ち続けたのに・・・、子孫が神からの恵みをふんだんに受けることになっていたはずなのに・・・せめて独り子でなければ良かったのに・・・。「あなたはイサクによってあなたの名を継ぐ子孫を持つだろう」と私に告げてくださっていた子を神がいけにえに望まれるとは・・・。

アブラハムは葛藤を抱えていましたが「アブラハムは、神が人を死者の中から生き返らせることもおできになると信じていたのです」（ヘブライ１１：１９）

彼が知性の従順を実現できたのは、自分が考える枠を越える神を信頼したからです。パウロの言葉によれば、希望のないところになお希望したからです。

一方息子のイサクは天真爛漫に聞いてはいけないことを尋ね、アブラハムの心を動揺させます。
イサクは父アブラハムに、「わたしのお父さん」と呼びかけた。彼が、「ここにいる。わたしの子よ」と答えると、イサクは言った。「火と薪はここにありますが、焼き尽くす献げ物にする小羊はどこにいるのですか。」 アブラハムは答えた。「わたしの子よ、焼き尽くす献げ物の小羊はきっと神が備えてくださる。」二人は一緒に歩いて行った。 （創世記 22：７～8）

アブラハムの態度こそ、知性の従順です。確かなことが分からなくても、私たちが考えるよりも偉大な神にお任せせること知性の従順です。神はすべてを手中に収め、すべてを知っておられ、すべてを計らってくださいます。
実際、その場所の名は「主は備えてくださる」と呼ばれることになります。
アブラハムはその場所をヤーウェ・イルエ（主は備えてくださる）と名付けた。そこで、人々は今日でも「主の山に、備えあり（イエラエ）」と言っている。 （14 節）

アブラハムは旧約の中でも知性の従順が際立つ最初の模範です。神秘を前に、はっきりしないことでも、心の奥で神秘の力を感じて敬意を示します。信仰の始祖です。

ヨブの歩みの終点（ヨブ記 40～42 章）

多くの言葉で反論したヨブでしたが、最後は円熟した従順に至ります。

「ヨブに答えて、主は仰せになった。全能者と言い争う者よ、引き下がるのか。神を責めたてる者よ、答えるがよい。ヨブは主に答えて言った。
わたしは軽々しくものを申しました。どうしてあなたに反論などできましょう。
わたしはこの口に手を置きます。ひと言語りましたが、もう主張いたしません。ふた言申しましたが、もう繰り返しません。」（ヨブ記 40：1～５）

前半のヨブの答えは、神の神秘は人間の枠より大きく理解しがたいことを認めたものです。

神の第二の答えが続きます。この部分（40：15～32）は難解です。個人的にはこう解釈します。自然について話した後、歴史について話している、と言う理解です。野獣のイメージを持つイスラエルと戦っても勝ち目はありません。また、全世界を破壊できる超大国エジプトとメソポタミヤを河の動物、どうもうな怪獣レビアタンで象徴している、のでしょう。神は、このような怪獣もみ手のうちに掌握しています。この場面の意味は、神は確かに論争を再開し、ヨブの言葉には立ち入らず、ヨブの考えの枠を広げようとされます。

話を戻します。
「主は嵐の中からヨブに答えて仰せになった。男らしく、腰に帯をせよ。お前に尋ねる。わたしに答えてみよ。」（６～７）

皮肉を込めてでもヨブをたたえます。
「わたしはお前をたたえよう。お前が自分の右の手で／勝利を得たことになるのだから」（14）

見よ、ベヘモットを。お前を造ったわたしはこの獣をも造った。これは牛のように草を食べる。
見よ、腰の力と腹筋の勢いを。尾は杉の枝のようにたわみ／腿の筋は固く絡み合っている。
骨は青銅の管／骨組みは鋼鉄の棒を組み合わせたようだ。（15～１８）

少し飛んでその先で
お前はレビヤタンを鉤にかけて引き上げ／その舌を縄で捕えて／屈服させることができるか。
お前はその鼻に綱をつけ／顎を貫いてくつわをかけることができるか。（25～26）

あえてわたしの前に立つ者があれば／その者には褒美を与えよう。天の下にあるすべてのものはわたしのものだ。 彼のからだの各部について／わたしは黙ってはいられない。力のこもった背と見事な体格について。 （41：３～４）

この地上に、彼を支配する者はいない。彼はおののきを知らぬものとして造られている。驕り高ぶるものすべてを見下し／誇り高い獣すべての上に君臨している。 （41：25～26）

二匹の巨大な獣の描写の終わりにヨブの回答があります。
ヨブは主に答えて言った。あなたは全能であり／御旨の成就を妨げることはできないと悟りました。「これは何者か。知識もないのに／神の経綸を隠そうとするとは。」そのとおりです。わたしには理解できず、わたしの知識を超えた／驚くべき御業をあげつらっておりました。「聞け、わたしが話す。お前に尋ねる、わたしに答えてみよ。」 あなたのことを、耳にしてはおりました。しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます。それゆえ、わたしは塵と灰の上に伏し／自分を退け、悔い改めます。 （42：1～６）

ヨブはとても美しい言葉で語り始めますが、聖書の中で似た場面があります。天使がマリアに向かって繰り返した言葉、イエスが金持ちに投げかけた言葉、貧者の救いについて繰り返された言葉です。「神には何でもできる」　神は人間の思いを越えることがおできになるのです。

パウロは、人知の越える神の計画をヨブと同じように確信しています。（ローマ 11 章参照）

ヨブは、知性の従順を宣言して信仰を告白します。
わたしには理解できず、わたしの知識を超えた／驚くべき御業をあげつらっておりました。
（42：３b）

あがいたり、食ってかかったことへのヨブの反省です。ヨブの意見にも道理はありましたが、人間の手には負えないことを（神をはっきり知ること）探ろうとしていました。5 節が続きます。私の考えではここがこの本の頂点です。私たちにとってもこの言葉が頂点です。

あなたのことを、耳にしてはおりました。しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます。 （42：５）

これこそ、ヨブの長い苦悩の遍歴の意味です。彼が知っていたと思っていた神は、間違ってはいませんでしたが、神のみ顔にピントを合わせることはできませんでした。今、ヨブの目は照らされて、神については議論すべきではなく、むしろ神に耳を傾け、神を礼拝すべきだと直観的に悟ったのです。この心構えが「愛情のこもった」という意味です。理性の力で理解しようとうぬぼれるのではなく、秘義の前で頭を垂れるのです。

この状態になると「私にとどまりなさい。私もあなたのうちにとどまる」（ヨハネ 15：4）というイエスの言葉に表現されている通り、神の秘義をそのまま感じ取る能力が恵みとして与えられるのです。神の秘義の前で取るべき唯一の姿勢は、神以外の一切の動機を沈黙させることです。
ヨブは、心の底から回心します。
「それゆえ、わたしは塵と灰の上に伏し／自分を退け、悔い改めます。」（ヨブ記４２：６）

ゲッセマネにおけるイエスの模範
知性の従順の第 3 の模範は、ゲッセマネのイエスです。

一同がゲツセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、「わたしが祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく恐れてもだえ始め、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈られた。」（マルコ 14：32～３５）
イエスにとってこれが唯一の悲劇的な試練だったのかは、私たちにはわかりません。福音書の他の箇所にほのめかされている幾つかのことから考えると、たぶんこれだけではなかったと思われます。ヘブライ人への手紙がイエスの地上の生活に言及しています。

この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです。（ヘブライ４：15）

「あらゆる点において」とある通り、ゲッセマネでは恐れ・惨めさ・痛み・絶望・屈辱などの試練を体験しています。12 章では「死に至るまで」の悲しみを味わっています。
イエスが何を感じておられたのかを知り、イエスと共に恐れと苦しみを味わうことが「愛情のこもった祈り」です。

イエスの恐れと私たちの恐れを比べてみましょう。「神の国を自分たちの中で作れるのか？」という恐れがあります。思い描く姿に教会がなっていくのか恐れがあります。親として、教師としての役割を果たせるのか恐れがあります。病気で命が危険な人にどう関わったらいいのか、恐れがあります。これらの恐れは、イエスの味わわれた試練につながっています。十字架上で見捨てられた、と感じたイエスの気持ちを私たちもわずかながら経験から知っています。

再びヘブライ人への手紙に戻ると、イエスが耐えた試練がこう記されています。
キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられました。

キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました。そして、完全な者となられたので、御自分に従順であるすべての人々に対して、永遠の救いの源となり、神からメルキゼデクと同じような大祭司と呼ばれたのです。（ヘブライ５：７～１０）

強調されているテーマは、従順です。イエスはご自分に従順な人の救いの源になられました。

イエスはゲッセマネの園で知性の従順をどう戦ったのでしょう？　逃げたり、引き返したり、活動を全部やめてしまう環境でも、踏み止まって立ち向かわれました。弟子たちには、逃げずにそこに踏みとどまり、考えを変えずに戦いに挑むよう伝えました。イエスご自身は、弟子たちの数歩前に進み、地面に平伏して「もしできることなら、その時が遠ざかるように」と祈られました。
イエスは、悪（誘惑）に立ち向かわれますが「この時が去るように」の祈りにあらわれているように、自分の弱さから出発しておられます。これはとても素晴らしいことです。

イエスの戦いは御父との戦いです。イエスは御父の御意志が勝利することを望んでいます。
「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」（マルコ 14：36）

自分がして欲しいことは「この杯が取り除かれること」ですが、父なる神に委ねて別のことを願います。「しかし、私が願うことではなく、み心にかなうことが行われますように」
イエスの言葉は、知性の従順の最終的な言葉、アブラハムやヨブ、旧約の時代を通じて信仰を歩んだすべての聖人を代弁する言葉です。

私たちは愛情を込めてゲッセマネのイエスの観想にとどまりこう願いましょう。「あなたは私に何をお望みですか？」「この現実を私はどう生きているでしょうか？」

結論としての省察
結論として３つの省察をお勧めします。

１．知性の従順の戦いの模範はゲッセマネの園で祈るイエスです。アブラハムやヨブ、マリアたちが体験した戦いの全てを要約する最終的な模範です。神の計画に自分がどのように合流するかを読み取るための最良の手本です。

２．誘惑に陥らないように祈る人は、もう半分勝利を手にしています。実際イエスは弟子たちに「誘惑に陥らないように祈りなさい」と強く勧めています。主の祈りの中で、この願いを絶えず繰り返すように訴えています。私たちはこの願いを口先だけで唱えてないでしょうか。

知性の従順の戦いには、闇雲に飛び込むのではなく、状況をよく見て、祈りながらそれらに立ち向かうことが大切です。神が今の場面を通して私たちを試しておられるのだと気づくなら、私たちはその試練の困難を半分以上克服しています。反対に今の状況を不運、妬み、悪意、不満で埋片付けるなら、そこから抜け出すことは難しいでしょう。霊的な成長もなく、ただ過ぎただけの出来事になってしまいます。
神から与えられた試練として受け止められるなら「主よ、私が誘惑に陥らないようにしてください。私が今、人生の大切な時を迎えていて、信仰と愛が試されています。どうか、私と共にいてくださることを感じさせてください。」

３．アブラハム、ヤコブ、そしてイエスが教えてくださる通り、真の勝利は人間の思考力や理解力をはるかに越えています。主導権（イニシアティブ）を持っておられる神の、尽きない創造性、驚くべき秘義に委ねることです。迷い・苦しみがあっても袋小路のいると考えてはなりません。神は私たちの予想を越えています。壁や袋小路も神への委託によって、飛び越え、克服することができるのです。
この委託は、人間の自由による最高の行為です。この委託によって神の前で私自身となれるのです。もともと私たちは神と対話するために造られています。神を愛といつくしみに満ちた父です。その神に全てを委ねることで自分を全うするのです。

「父なる神、どうかあなたを理解させてください。私たちの目が真理に開かれ、あなたを認め、救いの計画を受けいれられるようにしてください。」

振り返りの質問
Q.　３つの委託（知性の従順）アブラハム、ヨブ、ゲッセマネの園でのイエスから、何を学べるでしょうか？　神への委託の手本を持っているでしょうか？

Q.　これまでに知性の従順を試みられたことがあるでしょうか？

Q. 神様に委ねる一か八かのような賭けをしたことがありますか？　神様はその賭けをどのように応援してくれていますか？

８．ことばに尽くせない三位の秘義

人生の出来事、出逢う試練は、三位の秘義と触れ合います。人間も、世界も、歴史も三位の秘義に基づいています。

最初に、ダビデ・マリア・トゥロルドが体験している不治の病について語った言葉を読みます。彼は、病や死から癒されるのを願うのは正しいことかどうかと自問しています。

聖書の中で、盲人は見えるようなることを願い、会堂の司の僕は会堂の司の娘のために癒しの恵みを願い、マルタとマリアはラザロの蘇りを願い、カナンの女性は嘆願し、皆は願いを叶えられました。トゥロルドはこう続けています。

「しかし、神に対する尊敬を考えるときには、問題の重大さがまだ残っている。神に『私を治してください』と頼むのが正しいとは、私には考えられない。頼む気持ちは理解できるが、人間のレベルだけのこと。悲しみと絶望の闇の中で手探りするヨブのような立場に思える。

『私は神に介入してください（癒してください）』』とは祈らない。神が私に悲しみに耐える力をくださり、キリストの力をもって死に立ち向かわせてくださるように祈る。神が変わってくださるようにとは祈らない。神の重さを背負い、できれば私自身を変えられることを祈る。そして、私だけではなく、私たち皆一緒に万物までが変わることを祈る。」（「悪に直面し何を考え何を祈るべきか」ダビデ・マリア・トゥロルド「セルヴィトゥム」1989 年 64 号）

彼のことばは、私たちが普通考えない世界、神の秘義に心の目を向けさせます。イエスのことばも私たちをそう促します。特に受難予告のことばです。

それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた。しかも、そのことをはっきりとお話しになった。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。（マルコ８：31～32）

この受難予告は３度も繰り返されました。生前に自分の死について語り、死から出発して自分の生涯の意味を解き明かしました（特にエマオの弟子たちへの話）。イエスのように死を念頭に活動した人を私たちは知りません。受難予告以外にも受難に関わる預言をしています。

「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。しかし、わたしには受けねばならない洗礼がある。それが終わるまで、わたしはどんなに苦しむことだろう。（ルカ 12：49～50）

神秘的ですが、みことばの受肉のとき、みことばは罪との戦いに入りました。詩編からも想像できます。

「そこに、神は太陽の幕屋を設けられた。太陽は、花婿が天蓋から出るように　勇士が喜び勇んで道を走るように」（詩編 19：５～６）

イエスは試練を望まれ、悠然とそれに立ち向かう印象を受けます。詩編はこう続きます。

「天の果てを出で立ち　天の果てを目指して行く。　その熱から隠れうるものはない。」（７）

イエスは、最後の晩餐のはじめにこう言われました。
「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。（ルカ 22：15）

試練に入る望みを弟子たちの足を洗う行為からも読み取れます。
さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。（ヨハネ 13：１）

そして食卓を立ち、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰に巻き、それから弟子たちの足に水を注いで洗われます。これは私たちのため、私たちの命のため、私たちを清めるために、ご自分の命を与えることを意味する愛のわざでした。

実際、主はペトロに言われました。「もし私があなたを洗わないなら、あなたは私と何の関わりもないことになる。」（13：１～13 参照）

イエスの内面に深く入るように努めましょう。イエスは、ご自分があがなわれた人類の頭、死者の中から復活した長子、創造の初穂です。私たちは、イエスによって自分たちが造られた意味を知ることができます。イエスにおいて新しく創造されていることがわかります。イエスの内面は、人類の模範です。

疲れを知らない探求
ヨブ記は、神の義がどのようにあらわれ、人間がどのように理解できるかを飽くことなく探求します。闇をまさぐりながら、それでも苦悩の中から何かのひらめきを得て進む盲人のようです。19 章の終わりにひらめきが見られますが、解釈が難しい箇所です。
「憐れんでくれ、わたしを憐れんでくれ／神の手がわたしに触れたのだ。あなたたちはわたしの友ではないか。なぜ、あなたたちまで神と一緒になって／わたしを追い詰めるのか。肉を打つだけでは足りないのか。どうか／わたしの言葉が書き留められるように／碑文として刻まれるように。たがねで岩に刻まれ、鉛で黒々と記され／いつまでも残るように。わたしは知っている／わたしを贖う方は生きておられ／ついには塵の上に立たれるであろう。この皮膚が損なわれようとも／この身

をもって／わたしは神を仰ぎ見るであろう。このわたしが仰ぎ見る／ほかならぬこの目で見る。腹の底から焦がれ、はらわたは絶え入る。」（ヨブ 19：21～27）

謎に満ちたことばですが、何か１つの確信、信頼に満ちたひらめきが表現されています。確信に満ちたひらめきは、人間の洞察力を越えた何かに基づいているように理解できます。

真の愛の関係に入るには、神は拒まれる可能性があることにも挑まれます。延長線で御子の次の姿勢も理解できます。
御子は人間の冒険の中に飛び込み、試練に入り、内側からそれを生き抜きました。人間との関わりにおいても、父との関わりにおいても、疲れを知らぬ、消えることのない愛の富を築こうとなさいました。

ご自分を隠される神
イエスの受難を思うと、神秘的試練と呼ばれる試練の中でも最も厳しい試練を理解できます。感覚の夜、霊の暗夜、信仰の夜などと呼ばれるものです。自分にとってかけがえのない愛の対象が不在であるような絶望に似た闇をさまよっています。私たちは闇のなかを歩いているように感じますが、神は私たちが神を探し出すようにとご自分を隠されています。たとえ苦しく辛いことがあっても、神を尋ね求めることは愛を実践している時です。愛をより一層確かなものとするためのプロセスです。「私は探したけれど見つけられなかった。」苦しくても神を知る素晴らしいダイナニズムです。

結局、ヨブも「私は探したけれど見出せなかった」と言えます。なぜなら、神からもらった答えで神を罠にかけようという試みは失敗したからです。しかし最後には「今はこの目であなたを仰ぎ見ます。かつてはあなたのことを聞き知っていただけでしたが」（42：5 参照）と断言できるようになります。

自分が霊の暗夜を体験していたり、闇を生きる人と共にいるならば、暗闇の神秘を少しは理解できるでしょう。暗夜を経験していたら「この人は目が見えない。だから本人か親が罪を犯したに違いない」（ヨハネ９：１～１２参照）というような表面的な正義の法則に縛られません。むしろ「神の栄光がこの人にあらわれるため」というイエスの言葉に示される秘義に注目します。

神は、私たち被造物と関わり、絶え間なく活動する秘義です。闇と光・・・ご自分を隠したりあらわしたりします。そんな神を探求する私たちを通してご自分を示されます。
神がご自分を示してくださる方法は、私たちが期待するような明確なものではありません。イエスの親戚がイエスに勧めたように自分をアピールする方法ではありません。奇跡の時には自分をあらわしましたが、十字架の恥辱の時にはご自分を隠されます（持っている権能を使いません）。復活によってご自分を示されますが、束の間のことです。蘇ったことを誇るような世俗的な期待には姿

を隠されます。私たちにとっては、復活後ずっとこの世にとどまり、奇跡を続けたほうが神を信じやすいのは確かでしょう。けれども、啓示される神は、秘義に満ちた方です。神の秘義は、人目につくことを好む自己顕示欲ではなく、私たちが探求し、折に触れてあらわれる関わりを通してです。

神を知るためには、神を尋ね、神が示そうとするイニシアティブに従う必要があります。神のイニシアティブと違う方向に、神を引っ張ろうとする人には、神を知ることも神を受け入れることもできません。頭では理解できても、自分が期待しているような形でないことを受け入れるのは難しいでしょうから。神のイニシアティブに乗ることが必要です。
「太陽が空の果てから果てに天駆けるように、また、「勇士が喜び勇んで道を走るように」（詩編19：６）　神のイニシアティブの道を走り尽くす必要があります。

私の脳裏には、ロック・クライミングのイメージがあります。これは１つの遊びです。何の利害も計算もありません。だからこそ楽しいし、１つの冒険です。成功しないかもしれない恐れとスリルがあります。けれども、様々な困難を克服して、少しずつ頂上が見えてくる時、ついに克服できた深い喜びがみなぎります。これはロープウェイで簡単に登る人では味わうことができない喜びです。こう理解できたら、本当の神に向かって歩むべき道を把握できるでしょう。

神に造られた宇宙に、自分の命を与えるイエス。こんな自分に命を賭けられた御子イエスに似た者となるために、神秘の絶壁をよじ登る危険を冒す時、愛そのものの神に出会えるのでしょう。

愛の詩であるヨブ記
霊操の終わりにまとめます。ヨブの問題は、愛の問題だと理解できます。神を愛しているのに拒絶されたと感じるヨブは、愛する相手（神）の心をはっきり知りたいと願うばかりに、苦しみ、悶え、わめき叫びました。そうはしましたが、神を信じ続けていました。

試練の秘義の最初の黙想で、人間に対するサタンの賭けについてお話ししました。サタンは、「人間には無償の愛はない、自分を与え尽くすような純粋な自由はない」と主張していました。私自身、自分が神に対して抱いている愛が本当に報いを求めない愛かどうかじつはわかりません。あえて知ろうとするなら、ヨブのように困難に陥りいつまでも悩み続けるでしょう。けれども、神が私を試みられること、また、神は私の愛を完全な清めへと導いてくださることを知っています。実は、愛の問題は、私の問題ではありません。私に信頼を置き、ご自分と同じように愛せるように導く神の問題なのです。

私がしなければならないのは、私に体験させてくださる人間的、神的な楽しみ（ロック・クライミングのような）に、自分自身を全て神に捧げることです。純粋な神がなさる方法で、私を神に引き付けるのは神のお仕事です。

愛する者は、愛が見返りを求めない無償性から出ることを知っています。たとえ後では様々な見返りの恩恵を受けるにしてもです。愛は他と比べようがない自己贈与で、三位一体の神の命の反映です。

私たちが生きている意味をより深く理解できるように、私たちの無知を減らせるように主に祈りましょう。「『あなた方は、私が種々の試練にあった時、絶えず私と一緒に踏みとどまってくれた』今あなた方は私をよく知っている。私と一緒に教会を治める準備もできている。なぜなら私と一緒に神について知ろうと黙想中苦しんだのだから」とイエスが言葉を掛けて下さるように祈りましょう。

私の司教としての奉仕が１０周年に近づいている今、皆さんと教区中の全ての司祭に心からの感謝を捧げます。皆さんが私と一緒に、私の試練に踏みとどまり、あなた方の十字架を勇気を持って担ぎながら司教の試練の歩みに忠実だったからです。

「主よ、私たちの試練はあなたの試練、あなたの試練は私たちの試練でもあります。あなたの与えられた受難を黙想しながら、その苦しみにあずかる恵みをください。この恵みは、あなたの復活の力を知る確信を与えてくれます。」
この骨の折れる、しかし素晴らしい歩みを果たせるように一緒に祈ってまいりましょう。

振り返りの質問
Q. 神が隠れておられると感じたり、急にあらわれて下さったと感じたことがあるでしょうか？

Q. 自分には何かに対して疲れを感じない探究心があるでしょうか？　それが神の国のために役立っているでしょうか？

Q. 神の試練、私の試練に当てはまるものがあるでしょうか？

Q. 私はどのように、神にひきつけられているでしょうか？

Q. 『あなた方は、私が種々の試練にあった時、絶えず私と一緒に踏みとどまってくれた』このイエスの言葉をどう受け止めるでしょうか？

黙想終わりのミサ　無償の愛の輝かしい模範（年間 20 週の主日の説教）

第１朗読ルツ記１：３～８、14～16、22　マタイ 22：34～40

ルツの物語は、士師記に描かれている流血、戦争、残酷さ、不忠実などの記述の後にある、穏やかな間奏曲のようです。士師の時代、人間は互いに「狼」となって野獣のように振る舞っていた印象があります。けれども、その時代にも愛、親切、無私のあわれみがあったことがルツ記からわかります。また、ルツ記にはダビデの祖母、イエスの誕生地ベトレヘムについても語られています。
物語は、飢饉が災いして移住を余儀なくされ、故国を離れて遠い地に住まなければいけなくなった試練の描写から始まります。このような苦しみはかつて多くのイタリア人が体験したことです。今日では、イタリアはじめヨーロッパ全土に移民が流れ込んできています。私は明日フランクフルトに行きます。あの大都市のカテドラルの 100 周年にあたり、講演を依頼されました。演題は「第３世界からの大勢の移民開始以来ヨーロッパに打ち立てられつつある新しい他民族文化について」です。ドイツだけを取り上げても、今日、500 万人以上の移民が数えられますがその多くはトルコ人です。
ですから、やむを得ず移民する人々の苦しみは、現代の問題でもあります。自分の愛情深い土地から出て、不確実なことに挑戦するのは大きな試練です。ルツ記は、このような試練の最中に、さらに家族に厳しい追い討ちを受けたことが語られています。ナオミの夫エリメレクが死に、二人の息子も死んでしまいます。災いに悩まされる家族は、まるで神がこの家族を忘れ去ったかのようです。ナオミは、すべてに事欠く状態、希望も未来もない状態に陥ります。そんな時、英雄的で私心のないモアブ人ルツが登場します。モアブ人は異邦人であるばかりでなく、イスラエルから忌み嫌われていました。けれども、純粋で無償の愛がルツによって示されます。

ルツは言った。「あなたを見捨て、あなたに背を向けて帰れなどと、そんなひどいことを強いないでください。わたしは、あなたの行かれる所に行き／お泊まりになる所に泊まります。あなたの民はわたしの民／あなたの神はわたしの神。あなたの亡くなる所でわたしも死に／そこに葬られたいのです。死んでお別れするのならともかく、そのほかのことであなたを離れるようなことをしたなら、主よ、どうかわたしを幾重にも罰してください。

同行の決意が固いのを見て、ナオミはルツを説き伏せるのをやめた。二人は旅を続け、ついにベツレヘムに着いた。ベツレヘムに着いてみると、町中が二人のことでどよめき、女たちが、ナオミさんではありませんかと声をかけてくると、ナオミは言った。「どうか、ナオミ（快い）などと呼ばないで、マラ（苦い）と呼んでください。全能者がわたしをひどい目に遭わせたのです。
出て行くときは、満たされていたわたしを／主はうつろにして帰らせたのです。なぜ、快い（ナオミ）などと呼ぶのですか。主がわたしを悩ませ／全能者がわたしを不幸に落とされたのに。」 ナオミはこうして、モアブ生まれの嫁ルツを連れてモアブの野を去り、帰って来た。 二人がベツレヘムに着いたのは、大麦の刈り入れの始まる頃であった。（ルツ 1：16～22）

自分の故郷の愛着を捨てて見知らぬ場所へ、しかも未亡人となって姑についていくのを選んだルツに驚かされます。不安定な生活、孤独、軽蔑される可能性がある方を選びました。ルツの行為は、全く無私無償です。道理がありません。自分の里に戻って再婚するなど生活の建て直しをするのが道理にかなったことです。ルツは、未知のことに挑み、夫との思い出とその母への忠実に賭けました。「わたしは、あなたの行かれる所に行き／お泊まりになる所に泊まります。あなたの民はわたしの民／あなたの神はわたしの神。」　この言葉には「あなたは私の民、私はあなたの神」という契約の定式文の響きがあります。

ルツの委託が、彼女を新たにします。自分の部族という閉ざされた社会から抜け出し、愛の賭けに出ることで、神の秘義があらわれます。この素晴らしい行動が、ボアズとの結婚になり、キリストの系図に組み込まれるのです。マタイ福音書の冒頭を読むたびに、彼女のことを思い出し、道理を越えて姑への忠実を選んだ愛を想起します。

私たちはこの霊操で、試練と愛について長く黙想して来ましたが、今また聖堂の悲しみの聖母の像の前で祈ります。神の秘義に深く入れるようにと。互いのためにこれからたくさん祈りましょう。聖霊の実りでなければあり得ない無償の愛が、マリアと全ての聖人の取次によって与えられますように。